

高原に笑う雀鬼たち

「チャムドの名物男」に連れられ、
勇み足でジャン荘へ行けば、
そこは手強い雀士たちの巣窟だった……



チャムドで、雀鬼に出会った。いや、鬼になり切れなかったから、ただの「愚か者」といふべきかもしれない。

その男の名をアブラという。

彼は、チャムドに住む8歳以上の人間でオレを知らない者はいないと私にうそぶいてみせた。その理由が面白い。この2年間、アブラは鬼のように麻雀を打ち続け、負けたカネがなんと50万円（1元約15円）。何のことはない、麻雀で財産を失った男として有名なのである。

今から15年前、アブラは友人から借りた1万2000元を元手にトラックを買い、運送業を始めた。3年ほどは赤字だったが、90年代に入るとチャムド

野中章弘

1953年 兵庫県生まれ。アジアをフィールドに活字、写真、ビデオによるレポートを続ける。著書に「沈黙と微笑」「粋と絆」など。早稲田大学、東京大学講師。アジアプレス代表。

2 チャムド・ト 長江 を行く



にも建設ブームが起こり、建築資材の運搬でしこたまカネを儲けたらしい。その頃から、チャムドの成金たちと卓を囲むようになったという。1回あがると30000元の儲けというから、ほんの数時間で数万元のカネが動く。これはもう立派な博打である。

前には麻雀仲間の列ができていたそう。な。そうならば仕事は二の次。コツコツ働くのがバカらしくなり、毎日雀卓の前に座り続けた結果、丸裸寸前になるまでカネをむしりとられてしまったというわけである。

「博徒となり、妻も子も捨てて放浪しようと思った」ことも一度や二度ではない。聞けば聞くほど、「中国版・麻雀放浪記を地で行くようなアブラの人生である。幸いにも破滅一步手前でリンポチェ（チベット仏教の高僧）に救われ、ここ数年は麻雀断ちをしているという。」

恐るべしは麻雀の本場・中国の雀士である。ここでは老若男女、牌を握らない人間は珍しいほどに、麻雀は好まれており、その層の厚さたるや日本の比ではない。

結局、チャムド滞在中の戦績は二敗二分。一度も勝利の美酒を味わうことはできなかった。アブラを、愚か者と笑い者にしていた自分が恥ずかしい。私も放浪人生はあきらめ、そそくさと荷物をまとめてチャムドを後にしたのであった。

そのアブラに連れられ、チベットの雀士を求めて町を歩いた。私の願いはチャムド最強の雀士と一戦交えることである。10万円ほどの軍資金を懐にはみ、いくつかの雀荘で牌を握ってみた。ちよっとしたウォーミングアップのつもりで、アンちゃん風の遊び人たちとまず手合わせ。しかし、彼らは予想外に手強く、どつしても勝てない。ここで負けるようだとプロの雀士と打つなど問題外である。

こりゃいかん、とホテルに戻り、食堂のお姉さんやら人民病院の看護婦さんやらをかき集め、中国式麻雀の特訓をすることにした。賭けるカネは1回10〜30元。素人相手だからと余裕を持って臨んだものの、ここでもあつさりと負けてしまう。またたく間に4000元を払う八メになってしまった。